

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 15 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320048

研究課題名(和文) 八重山諸島における音楽文化の伝播 台湾との関係を中心に

研究課題名(英文) Propagation of music culture in the Yaeyama Islands -with relation to Taiwan-

研究代表者

岡部 芳広 (OKABE, YOSHIHIRO)

相模女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：50582152

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,800,000円

研究成果の概要(和文)：台湾と八重山諸島との音楽文化の伝播・交流についての調査・研究を通して、ハーリーや獅子舞などの芸能に見られる類似性や、石垣島の台湾系住民による音楽行動について着目した。ハーリーは、中国や台湾でおこなわれる「賽龍舟」と起源を同じくするもので、八重山にもいくつか見られるし、八重山の獅子舞は台湾のものと酷似している。石垣島には、植民地期以来約500名の台湾系住民がおり、琉球華僑総会八重山分会を組織している。その活動のなかで、「婦人部」が踊りを踊るなどの活動をしており、これは単なる余興の域を超え、「台湾人アイデンティティの継承」の役割を付されている部分があるということが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Through surveys and research on the propagation and exchange of Taiwan and the Yaeyama Islands music culture, we focused on similarity seen in performing arts, such as Okinawa Harley, and the musical activities by Taiwan-based residents of Ishigaki. Hurley, which has the same origin as "Sai Long Zhou" takes place in China, Taiwan, and is also found in Yaeyama. "Lion Dance", which is performed in Yaeyama is also very similar to the type of "Lion Dance" found in Taiwan. The 500 resident Taiwanese, who have lived on Ishigaki Island since the colonial period, have organized "The Ryukyu Overseas Chinese General Meeting Yaeyama Branch". Its activities include dance which is performed by female members of the branch. It is clear that, dance plays a larger role than just entertainment, it also forms part of their Taiwanese identity.

研究分野：音楽学

キーワード：八重山 台湾 芸能

・研究開始当初の背景

中国本土が沖縄全域の音楽や芸能に影響を及ぼしたということは、すでに研究成果が出されているが、台湾と沖縄、台湾と八重山といった観点での音楽交流史的研究は十分ではなかった。また、石垣島における台湾系住民の文化的側面についての研究も、一部の宗教儀礼に関する研究以外はほとんど見られなかった。

・研究の目的

- (1) 八重山の芸能に、台湾からの影響とみられる要素があるか。
- (2) 石垣島の台湾系住民の音楽行動の全容と意味を明らかにする。

・研究の方法

八重山諸島、沖縄本島及び台湾における文献調査、聴き取り調査、パフォーマンスのフィールドワークを実施した。フィールドワークの対象としたのは、石垣島、与那国島、黒島、奄美大島、南大東島、沖縄本島(安田)、台湾(花蓮県奇美部落)であった。

・研究成果

研究成果は 1.八重山の芸能と台湾との関連性についてと、2.琉球華僑総会八重山分会の活動における「踊り」をめぐって、の2項で構成している。

1. 八重山の芸能と台湾との関連性について

ここでは(1)台湾と八重山の民俗行事からの考察、(2)文献調査からの考察、(3)現地調査からの考察、で構成する。

(1)台湾と八重山(南西諸島全般も含む)の民俗行事からの考察

台湾と八重山(南西諸島全般も含む)には民族行事としての共通性が見られる。(以前の調査結果も含める)

春節(旧暦1月1日)

台湾の三大節句の中で最大の節句が春節である。この週間は沖縄では近年新暦に移行してきているが、沖縄・奄美では旧正月行事として伝承されてきている地域もある。調査で明らかになった事例としては、奄美市笠利町節田「節田まんかい」(2015年2月18-20日)、竹富町黒島「綱引き」(2012年1月22-24日)、島尻郡粟国村「マースヤー」(2006年1月28-29日)がある。

舟漕ぎ儀礼

台湾では端午節(トゥアンウーチエ)にドラゴンボートレースが行われる。沖縄ではハーリー(ハーレー)と呼ばれて、豊年祭等で競漕が特に八重山地方で盛んである。調査からの事例としては、竹富町黒島「豊年祭」(2006年7月20-23日)、竹富町西表祖納・干立「節」(2008年10月25-29日)、国頭村大宜味村塩屋「海神祭」(1999年8月27-28日)

十五夜(中秋の名月)

台湾では中秋節(チオンチウチエ)と呼ばれている旧暦8月15日の行事で、家族で月餅を食べる習慣がある。沖縄ではこの習慣を確認できなかったが、十五夜の日に様々な行事が行われている。調査で確認したのは、糸満市・真栄里「綱引き」(2013年9月19-20日)、島尻郡東風平世名城「ウスデーク」(2002年9月21日)、八重山郡与那国町(2012年8月28-29日)。

豊年祭

台湾の東海岸では、花蓮アミ族(2014年8月15-19日)など稲刈り後の豊年祭で盛り上がる。八重山では石垣市の各地、竹富町黒島(2006年7月20-26日)、時期がずれるが宮古郡多良間村(2006年9月27-10月2日)での豊年祭などが行われている。

(2)文献調査からの考察

『舟漕ぎ競争の伝播』秋山一・他編『沖縄船漕ぎ祭祀の民族学的研究』勉誠社 1995]では爬龍船について次のように述べている。

爬龍船祭り(舟漕ぎ競争)は往古より広く中国華南全域に亘って行われている行事であり、その競技の内容には沖縄、中国両者にすこぶる共通している面がある。糸満の漁民社会では古くから存在していた信仰体系の中に、船漕ぎ行事も宗教儀礼の一つとして融合させながら受け入れて来たものと思われる。ウンガミ祭は先に述べた平安座のシヌグおよび国頭村安田に見られるシヌグ(ウンガミ)祭と同様に、沖縄本島北部の地方に古くから伝えられている民間信仰に見られる神観念なり世界観であったと考えられるのである。そして、このようなウンガミ(海神)信仰の儀礼の中に爬龍船を漕ぐ習俗が組み込まれて、今日見られるような爬龍船祭が生み出されてきたのではないかとと思われるのである。八重山における舟漕儀礼には、先に述べた如く陰暦の五月四日に行われる沖縄本島の糸満漁民が齎した爬龍船祭とそれとは別に八重山諸島に見られるプーリイ(収穫儀礼)とか、シティ(折目)のように、その島の住民に古くから伝えられて来た祭祀儀礼と結びつけられて、とり行われる舟漕儀礼の二つのタイプが存在していることが分る。舟漕ぎの競技が、盛大にしてかつ公的な性格を持つ祭祀儀礼として、南島諸島に偏在する基層文化とも云うべき在来のシヌグとかウンガミあるいはシティなどの祭儀に見られるような宗教的観念や祭祀儀礼の中に受け入れられるようになった積極的な誘因は疑いなくそれは中国大陸との文化的交流に端を発するものと思われる。沖縄で龍舟競漕の行事はその遡源をたづねれば明代に中国特に福建の地から導入されたということが出来る。

沖縄でハーリー(ハーレー)と呼称されている舟漕ぎ競争は、次の事例のように数多い。

八重山郡与那国町海神祭爬龍船競漕大会 / うるま市屋慶名ハーリー / 八重山郡竹富町黒島「パーレ競漕 / 八重山郡竹富町西表島祖納 : ユークイ (舟漕ぎ) / 干立 : フナクイ (舟漕ぎ) / 糸満市ハーレー [『おきなわの祭り』 沖縄タイムス社 1991年]によると、ハーレスなわちフナハラシ (競舟) は中国の競渡と同意の呼称で中国雲南省から銅鼓の遺物が多く発掘され、2枚の残片に刻まれた舟紋の絵は糸満のウグワンパーレーによく似ていると論じている。] / 南城市奥武島海神祭 / 南城市馬天ハーリー / 南城市海野ハーリー / 石垣市爬龍船競漕大会 / 那覇市ハーリー / 宜野湾市はごろもハーリー競漕 / 島尻郡八重瀬町港川ハーレー / 島尻郡渡嘉敷島阿波連ハーリー / 島尻郡粟国村海神祭 / 島尻郡久米島真泊ハーリー / 島尻郡久米島島島ハーリー / 島尻郡久米島儀間ハーリー / 島尻郡渡名喜村海神祭 / 島尻郡渡嘉敷島阿波連ハーリー / 豊見城市ハーリー大会 / 中頭郡嘉手納町ハーリー大会 / 中頭郡北谷町ニライハーリー大会 / 中頭郡嘉手納町嘉手納ハーリー大会 / 国頭郡恩納村万座ハーリーフェスティバル / 国頭郡恩納村前兼久ハーリー / 国頭郡伊江村伊江島海神祭 / 屋慶名ハーリー / 宮古島ハーリー / 読谷村ハーリー / 塩屋のウンガミ (海神祭) でのハーリー

以上であるが、中国・台湾とは目的が変容しているが、舟漕ぎ競争自体は極めて共通性が高いと言える。

「八重山地方の稲作儀礼と龍船競争」(松尾恒編『琉球弧 海洋をめぐるモノ・人、文化』岩田書院 2012)では、競漕について次のように論じている。

琉球時代に中国との交易の中心地であった那覇に端午の龍舟競渡が伝来した後、急速に琉球各地域にハーリー船競争が伝播したが島嶼・地域によっては変容が認められる。本島の北方、奄美大島にも船漕ぎ競争があるが、8月上旬に開催されるものが多く、琉球本島に中国より伝来した龍船競争とは系統を異にする。台湾に近い宮古島、石垣島、西表島、黒島、与那国島等、宮古・八重山地域では、稲をはじめとする五穀の収穫を祝う豊年祭や、節祭(シチ)などの祭礼における一行事として、龍船競争が行われる例が多くなる。共通しているのは女性宗教者ツカサが御嶽における神事の中核部分を担うこと、競船が沖へと漕ぎ出し、弥勒世(みるくゆ)たる、世果報(ユガフ)を海のかなたの異郷ニライカナイより迎えるといった信仰のもとに龍船競争が行われていること。地域の農耕と結びついた信仰の影響を強く受けて変容したのが、八重山地域の豊年祭や龍船競争。台湾における「端午龍舟競漕」の歴史は、終戦の前と後とに大きく区分できる。1945年前後の「端午龍舟競漕」の特徴は、龍神信仰+清朝による開拓期と日本統治時代の経済構造、および龍神信仰+国民党の非

常時期と民進党による国際観光化の経済構造にある。「台湾端午龍舟競漕」の変化は、まさに明末・清初依頼の漢人の移民史、その後に展開した開拓史や政権交替等、種々の歴史が反映されている。清領期には農耕儀礼と徐厄穰災の目的より、農民・漁民が競漕活動の主体となった。祖納・干立ともに、節祭ではハーリー船競争が行われるが、こうした船漕ぎ競争は、沖縄本島から宮古、八重山・与那国で、琉球文化圏の広域で行われている。その起源は中国の端午における龍舟競争渡が1400年頃、本島に伝来して定着したもの。本島では端午に行事としてではなく、(旧暦)5月4日を意味する「ユッカヌヒー(4日の日)」の行事として、海神への祈願として行われる地域が多いが、八重山地方では、稲作と関わる豊年祭や節祭において、ニライカナイより神を迎える神事として行われる例も少なくない。沖縄本島への伝来後に、南方の諸島に伝播し、地域の農耕と関わる信仰と結びついて変容して民俗化した行事として注目される。端午の龍舟競渡は、大陸・台湾においても現在、主に南方の諸地域の河川で盛んに行われており、東アジアにおける分布の中では琉球地域の龍舟競漕の民俗的特質を位置づける必要もある。一方、琉球域においても、大陸・台湾においても、多くの地域に置いて龍船競争が、自治体による政策などもあって、大勢の観光客を集めるイベント的性格を強めている。

又吉盛清「台湾との文化交流史」(『沖縄文化の軌跡 1872-2007 沖縄県立博物館・美術館 2007年』)では、琉球処分と台湾についての論点が見られる。

1871年の琉球船の台湾漂着事件は、明治政府が琉球処分に利用した台湾出兵につながり、その後の琉球国の日本国家の統合から台湾植民地支配の画策と連動し、まさに沖縄と台湾の運命共同体なかわりを証すものになった。沖縄人は日本人社会では弱者として被害者の側面もあったが、植民地者の一人として台湾人に対処していた。このような中では、台湾人との真に対等で友好的な交流が成立する余地はなかった。

沖縄国際大学南島文化研究所編『八重山の地域性』(編集工房東洋企画 2006)では、音楽表現に関しての影響を論じている。

自らの声だけで事前倍音のハーモニーを抽出するすぐれた音感、台湾の原住民、ブヌン族やツオ族の合唱とも通ずるところがある。[新城の節(世願ひの歌)](『八重山古謡第二輯』より)。琉球処分に際して、明治政府は清朝に対して宮古・八重山を割譲する提案をした

(3) 現地調査からの考察

本項では過去の調査結果をも含めて考察を行う。

西表島祖納「節祭ユークイ」 = 2007年11月1~3日[旧暦己亥(つちのとい)から3日間] 沖縄県八重山郡竹富町西表島祖納

「船元行事」(写真1)

12時、「船元行事」の開会が宣言される。まず舟浮かべの儀式、紅白それぞれの旗を付けた2隻のサバニが浜から海へ曳き下ろされた。12時10分、一番旗を先頭にヤフヌテイ(船漕ぎの櫂)を持って船頭と舟子が入場。二番旗を先頭に《ミリク節》で子どもを伴ったミリク入場、浜から中央石段を上ってテント内の「トリミチ」へ。次に三番旗を先頭に《ユナ八節》で婦人アンガーが先頭にフダチミ、最後に締太鼓2台を伴って押し手をしながら御座へ、船元の御座に着座する。天気は曇り、強風、海は少々荒れている状況だ。12時40分にすべての入場が終了、12時50分から開会行事があった。その中で来賓から「農耕文化の原点」というコメントがあった。「節祭」は農耕の周期による新しい年を祝う行事なのだ。村内を走る車の1台のフロントガラスに「注連縄」が付けられていた。いよいよ芸能が始まる。13時30分、船元の御座でミリク神の座トゥリムチ(奉納舞踊)。

「ユークイ儀式(舟くい)」

館長の激励、舟子代表挨拶の後、舟の紅白抽選があり、すかさず前乗りはそれぞれの舟へ飛んでいき「アダヌにて舟を清め」舟を東へ向けて3回漕ぎ、舟を浜へ引き寄せた。船頭はマスサイを懐に入れ、ユークイ儀式「舟くい」がスタートした。乗り手は12名、歌を歌いつつ漕いでいる。ところが1隻が左カーブで赤旗の舟が転覆、必死で両側から乗り込み何とか成功した。浜ではアンガーの女性たちが手招きのパフォーマンスで声援を送る。まず白旗が到着、ガーリーが舞う。2隻目の赤旗も遅れて到着、1隻目とアンガーの女性たち全員でガーリーだ。もっとも注目していた群舞・乱舞が目の前で繰り広げられた。船頭は神司へ報告、前乗りはパチカイ言上、「仮船頭船子は舟揚げ安置した。転覆した舟にはたっぷり海水が入っていた。今年は天気が悪いため、「舟くい」も短縮されて実施された。

石垣島/黒島の豊年祭調査 = 2006年7月20~23日

夕刻になり、ガーリが始まった。地元の方々がどんと道路を舞台とし、乗り込んで各々の踊りをする。手の甲を上にしたり下にしたりする。いわばカチャーシーや六調と同じだ。続いて「ツナヌミン」。道の両側から五穀献上と受け取りが、若者たちに担ぎ上げられた担架でしずしずと登場する。御嶽の前で豊作に感謝する儀式だ。八重山は6月に第1回の稲の収穫がある。その後この豊年祭が位置付けられている。年3回の収穫の祝いなのだ。八重山は沖縄もっとも稲作が盛んなところである。そして「綱引き」に移った。雌雄の綱が道の両側から登場し、一進一退を

繰り返しながら御嶽の前に。本来は雌雄の綱が天に向かって競りあがり結ばれるが、ここでは下にもぐって結ばれた。その瞬間、勝負がスタートした。金武町の綱引きはあっという間に決着がついたが、ここではしばらく引き合いが続いた。参加者全員が綱を引くとあって、騒然とした緊張感が空間を支配していた。決着がつくと再びガーリだ。各々最後を惜しむかのように、パフォーマンスを楽しんでいた。20時30分、こうして3時間半の豊年祭は終了した。



写真1 西表島祖納「船元行事」(2007年)

2. 琉球華僑総会八重山分会の活動における「踊り」をめぐって

1. はじめに

1895(明治28)年に日本が台湾を領有し、翌年には日本本土と台湾とを結ぶ航路が開かれたが、石垣島はその船の寄港地となり、日本と台湾との間で人や物の移動の拠点となっていく。その後、台湾から石垣島に移り住む者も現れ始めるのだが、大規模な移民は、1932(昭和7)年7月の台中州から名蔵への100人以上におよぶ農業移民の入植、そして1935(昭和10)年の大同殖産株式会社設立による農業移民の入植である。また、戦後も沖縄県の農業政策により、パイン産業従事者を計画的に台湾より入域させた。ピークであった1968(昭和43)年には700人もの台湾人が石垣島に渡っている。このように、おもにパイン産業に従事するために台湾からやって来た移民と地元住民との間には、土地問題等で軋轢が生じた時期もあったが、台湾移民が積極的に地元住民と融和をはかろうとしたことなどにより、その後関係は改善していくこととなる。この、関係の改善に貢献したのが「台友会」という台湾移民の団体で、当時リーダー格であった林發が中心となって結成された。この団体は、戦後「八重山華僑総会」に発展し、中華民国政府が公認する民間団体として、ビザの発給などの公務代行も行っていたが、その権利は本島の団体に譲渡され、「琉球華僑総会八重山分会」となった。ここでは、この「琉球華僑総会八重山分会」(以下、八重山分会と表記)の、音楽行動について考察する。

2. 八重山分会婦人部の「踊り」

土地公祭という宗教儀礼、及び双十節（中華民国の国慶節）のときには婦人部の有志メンバーによる踊りが披露される。土地公祭で行われる踊りは、宗教的な「神への奉納」という意味と、参加者を楽しませる余興の両方の意味を持つと思われる。一方、双十節での踊りは、形式的には酒宴に華を添える余興として行なわれているといえよう。ここでは、2012年10月10日の双十節祝賀会の次第とともに、踊りについて見ていきたい。

祝賀会が始まって約1時間ほどしたところで、八重山分会婦人部（5名）による踊りが始まった。概要は表1の通り。

表1 2013年10月10日 双十節祝賀会での踊りの演目

	1 曲目	2 曲目	3 曲目
曲名	《桑港のチャイナタウン》	《高山青》	《台湾楽しや》
作詞	佐伯孝夫	鄭禹平	辰巳利郎
作曲	佐々木俊一	張徹 黄友棣 編曲	山川康三
歌唱	渡辺はま子	青山	霧島昇 渡辺はま子
年	1950年	1952年	1942年
衣装	チャイナドレス	アミ族の民族衣装	台湾風民俗衣装
振付	日本舞踊教師	婦人部による創作	八重山舞踊教師

1 曲目の「桑港のチャイナタウン」は渡辺はま子の代表曲で、戦後日本で流行した歌謡曲である。直接台湾とかかわりの深い楽曲ではないが、いわゆる中華イメージを喚起させる曲だと言えよう。衣装は洗練された「旗袍」（チャイナドレス）で、大きな羽の扇を持ち、流れるような滑らかな動きで優美に踊られた。この曲は石垣島在住の日本舞踊教師が振付をしている。（写真2）



写真2 《桑港のチャイナタウン》

2 曲目の「高山青」（カオサンチン）は、1947年の映画「阿里山風雲」の主題歌を後に編曲

してできた曲だが、もとは阿里山に住むアミ族の民謡だといわれている。婦人部手作りのアミ族の民族衣装を身に付け、自分たちで創作した振付で踊られた。動きは躍動的で、体に付けた鈴の音が特徴的であった。（写真3）



写真3 《高山青》

3 曲目の「台湾楽しや」は、植民地時代の1942（昭和17）年に作られた曲で、霧島昇と渡辺はま子が歌った、台湾の風光明媚な良さをアピールした曲である。使われた音源は、胡美芳の1977年の録音のものと思われる。台湾風の民俗的な衣装に、赤く太いリボンのような飾りを手に踊られた。どこか可愛げな動作が特徴的であった。この曲は石垣島在住の八重山舞踊教師が振付をしている。（写真4）



写真4 《台湾楽しや》

これら3曲の特徴をまとめたのが表2である。

表2 踊られた曲の特徴

	1 曲目	2 曲目	3 曲目
曲名	《桑港のチャイナタウン》	《高山青》	《台湾楽しや》
曲のイメージ	中華イメージ	台湾原住民イメージ	植民地期のイメージ
衣装のイメージ	中華風	原住民風	台湾風
歌詞の舞台	戦後海外の中華街	戦後台湾	植民地期台湾
振付	日本舞踊教師	婦人部による創作	八重山舞踊教師

意図したわけでもないと思われるが、台湾をめぐるあらゆる要素がちりばめられていることがわかる。植民地期以前、植民地期、植民地期以降、また、中華、台湾、原住民、といったいくつかのフェイズで切り取られた台湾がコラージュされているように見て取れる。それだけでなく、さらに興味深いのは、自分たちで創作した振付だけでなく、石垣在住の日本舞踊教師、八重山舞踊教師に振付を依頼したことである。踊りの動作にどのようにそれらの要素が入れ込まれているのか、本稿ではその分析まではできなかったが、日本 八重山 台湾 という3つの地域の文化が交錯し、しかもその台湾の中には、あらゆるフェイズの台湾イメージが盛り込まれるという、「マルチカルチュラル」な様相を呈していると言えよう。

3. 考察

前述したように、現在台湾系住民には五世が誕生しており、結婚などの理由で戦後渡ってきた人たちもいるが、石垣島で生まれた人たちが圧倒的に多数となっている。戦後しばらく台湾系住民（主に二世）には、自分の出自が台湾であることを隠し、「沖縄アイデンティティー」を身に付けることを目指した時期があった。しかし、現在は三世・四世を中心に、自分が「台湾系」であることにあまり自覚的でない人が増えており、その一方で、埋没しつつある「台湾アイデンティティー」を取り戻そうとしている人たちも増えて来ている。例えば、現在八重山分会の役員をしている二世・三世の人たちは、台湾系住民の間で台湾アイデンティティーが薄れていることを憂慮しており、対策を講じることが急務と感じている。

そういった状況の中、八重山分会の役員たちは、台湾のあらゆるイメージを盛り込んだ、婦人部の踊りを台湾系住民全体で共有することに対し、薄れつつある台湾アイデンティティーを喚起する／保持していく機能を期待しており、踊りは八重山分会の活動の中で、重要な役割を担っていることがわかった。一方、踊り手たちの意識にはある特徴があった。台湾出身者の踊り手たちは、「踊りがあった方が行事が楽しくなるから」、「台湾が懐かしいから」という踊りに対する意識を持っていたが、石垣で生まれた踊り手は、「台湾人としての意識を持つため」、「台湾人としての意識をみんなに持ってもらいたい」と、台湾アイデンティティー喚起／保持への期待を持っていた。

このように、踊り手の意識は統一されたものではなく、踊りを観て受け取る側の意識については今後の調査が必要であるが、少なくとも婦人部の踊りは、単に行事に華を添えたり、故郷を思う気持ちを表現するだけにとどまらないものであることがわかった。役員も踊り手も、そういった思いを、踊りを観る人たちに言葉で伝えることはないため、前述し

たように形式的にはあたかも「余興」でしかないように映る。しかし、そこには台湾アイデンティティーを取り戻すための思いと機能が潜んでいることが明らかとなった。

・主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

岡部芳広「石垣島における台湾系住民の音楽行動 2012年10月10日、双十節を中心に」相模女子大学紀要（人文系）77A、2014年3月

〔学会発表〕(計1件)

岡部芳広「石垣島における台湾移民の音楽行動 琉球華僑総会八重山分会婦人部の活動を通して」

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

・研究組織

(1)研究代表者

岡部芳広 (OKABE YOSHIHIRO)

相模女子大学・学芸学部・准教授

研究者番号：50582152

(2)研究分担者

岩井正浩 (IWA I MASAHIRO)

愛知淑徳大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：80036392